岩波文庫
641

土佐日記

池田亀鑑校訂

岩波書店

岩波文庫
641

土佐日記

池田亀鑑訂校

岩波

凡例

一、本書は、前田侯爵家藏藤原定家自筆土佐日記を底本とし、人見卜幽が土佐日記附註によれる本卽ち藤原爲相筆と稱せらるゝ本の本文をもつて校合し、その異點を脚部に注記せり。

一、校訂にあたりては、明かに定家の誤寫と思はるゝものの外、みだりに私意を加へて改むることをせず。出來得るかぎり、原本を忠實にうつさむことに努めたり。但し假名遣はこれを統一し、句點を施し、假名には多く漢字をあて、一般讀書の便を計りたり。しかれども、漢字をあつる際には、原本の假名を右傍にとどめて、その面目を示したり。

一、別に附錄として、藤原惺窩が眞名をあてて校訂せしといふ妙壽院本の本文を加

へたり。妙壽院本は、已に季吟の「抄」に引かれたれど、全本未だ學界に紹介せられず、今校訂者所藏の古寫本によりて、その全文を示し得たるは、私かに欣びとする所なり。但し、家藏の本は卷頭一葉を缺くをもつて、この部分は、刈谷圖書館藏、村上忠順舊藏の本をもつて補へり。

一、本書の校訂にあたりては、畏友松田武夫、大津有一兩氏の助力を得たり。こゝに記して感謝の意を表す。

昭和五年二月十一日

校訂者識

解說

(一) 名稱

土佐日記の「土佐」の字は「土左」とも當てられる。前田侯爵家所藏の定家自筆本がさうなつてゐる。もと蓮華王院の寶藏であつたと云ふ本は、卷子本で、外題に「土左日記」とあつたらしい。又別に貫之が記ともよばれる。土左日記とは、土佐の國から、京に歸りのぼるまでの路次の記といふ意味であらう。

(二) 作者

紀貫之の作であると云はれてゐるが、恐らくさうであらう。天暦五年の撰にかゝる後撰集には、明かに貫之の名をあげ、歌と共に詞書さへこの日記から取つたかの如く見えてゐる。又前田家藏の惠慶集中には「つらゆきがとさの日記をゑにかけるを、い

つとせすぐしける家のあれたる心を」とある。貫之が女性に假託して書いたものとする説は、相當古くから存在してゐたものである。今はこれを否定する確かな證據がないのであるから、しばらく古説に從ふ。

（三）成立年代

紀貫之家集に「延長八年土佐の國に下りて、承平五年京にのぼりて、左のおとどのしら川におはします御ともに云々」とある。この承平五年とは、着京の年であつて、土佐國出發の年ではない。定家自筆本の奥に「紀氏、延長八年任土左守、在國載五年六年之由、承平四甲午五乙未年事歟云々」とある。清輔の袋草紙にも「延喜八年正月任土佐守、卽赴任、承平五年上洛之時云々」とある。但し、ここに延喜とあるは誤りである。これ等によつて考へると、貫之が承平四年十二月二十一日、土佐國を舟出し、翌五年二月十六日、京に着くまでの間の事を書いたのが土佐日記である。日記中に、「五とせ六とせのうちに、千とせやすぎにけん」といふのは、赴任より歸京まで、前

後六年であるからである。按ふに、この日記は、旅のつれづれ、舟中にて筆を執つた心覺えを、歸京後、更に推敲修補したものであらう。そして、もし蓮華王院寶藏の紀氏自筆本といふものが、果して誤りのないものであるとせば、定家の記したるがごとく、高さ一尺一寸三分、廣さ一尺七寸二分の料紙廿六枚をつぎ合はせた卷子本に淸書され、何人か、さるやんごとなき人のもとにおくられたものか。

(四)　諸　本

前田家藏の定家自筆本は、土佐日記の最も古い寫本の一である。この本は六半本胡蝶裝の古雅な料紙に、一面九行或は十行に書かれてゐて、奥に、

文曆二年乙未五月十三日乙巳老病中雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆本蓮華王院寶藏本料紙白紙不打無堺高一尺一寸三分許廣一尺七寸二分許紙也、廿六枚、無軸、表紙續白紙一枚端聊折返不立竹無紐有外題、土左日記貫之筆其書樣和歌非別行定行に書之、聊有闕字哥下無闕字而書後詞、不堪感興自書寫之昨今二ケ日終功、桑門明靜。

とあり、かつ貫之の眞蹟を人に知らしめむがために、末尾數行を、原本について臨摹し、見本として卷末に示して、

爲令知其手跡之體如形寫留之謀詐之輩以他手蹟多稱其筆可謂奇怪。

と云ひ、紀氏の略譜をかかげ、更に、

今年乙未 歷三百一年紙不朽損其字又鮮明也、不讀得所々多只任本書也。

と云つてゐる。これによつて、原本は相當完全に保存せられてゐたことが分り、文字は難解で、定家の博學をもつてさへも、なほかつ讀み得ない箇所があつたらしいことが分る。この文字の難解といふことは、古體の草假名であつたことを意味するので、これによつて定家もたび〳〵誤寫したのである。なほこの定家の書寫の誤りについては、橘純一氏が、「定家本土佐日記の研究」といふ好論文に於て、一々指摘考證されたから、參考すべきである。

この定家自筆本の本文は、流布諸本の源流をなした。先づ、北村季吟の「土左日記

抄」の本文は、この本により、岸本由豆流の「土左日記考證」にも、富士谷御杖の「土佐日記燈」にも、この本文が重要なものとして參考せられてゐる。定家自筆本は、寛永の頃已に加賀家の祕庫にをさめられて、容易に門外に出なかつたのにかかはらず、この本を最も忠實に摸した轉寫本は、德川中葉以後可なり多く傳へられてゐる。現存せる本にて、管見に入りたるは、天龍寺所藏本、高野辰之博士所藏本、京都帝國大學所藏本、大津有一氏所藏本、この稿筆者所藏本等である。「考證」及び「燈」に引用せる定家本にして、字句の相違あるは、轉寫の際の誤寫に基くであらう。定家自筆本は、今回育德財團によつて複製頒布せられたから、何人にも容易に閲覽することが出來るやうになつた。

次に、定家自筆本に對して、最も親密にしてかつ重要なる異本の地位に立つものに、亞槐本がある。亞槐本には二つの系統があつて、一は群書類從所收本であり、二は妙壽院本又は片假名本である。先づ類從本は、奥に、

本云、土佐日記以貫之自筆本故將軍御物希代之靈寶也。今依或人數寄深切所望書之、庶密々自小河御所申出云々

古代假名猶科蚪未愚臨寫有魯魚哉。後見輩察之而已。明應壬子仲秋候。亞槐藤原判。

とある。右の奥書には誤字も相當あるが、ともかく、故將軍御物といふ貫之自筆本によつて書寫したといふことは確かである。しかるに、同じく貫之自筆本によつたといふ前記定家本に比すれば、相當に誤差が存する。この類從本系統の本は、わりに稀れで類本が少い。寛永二十年刊本、萬治三年刊本の外、高野辰之博士所藏の一本、この稿筆者所藏の一本等は、共にこの系統の本であるが、多少の出入がある。

次に妙壽院本は、類從本とほとんど同樣の奥書をもつてゐて、等しく亞槐本の系統のものである。妙壽院本とは、北村季吟の「土左日記抄」に「妙壽院眞名をくはへ給ひし本侍云々」と云つてゐる本のことである。妙壽院とは、藤原惺窩の法名であることは云ふまでもない。「抄」には、妙壽院本として、その奥書を引き、本文中にも、

定家本と異る所に、その本文を抄記してゐる。この妙壽院本は、傳本がきはめて稀れで、今日まで、「抄」に引抄せられてゐる本文と、「燈」と「考證」とに引かれてゐる本文の外は、全本がまだ學界に紹介されなかつた。しかるに、この妙壽院本といふものは、「燈」に、片假名書古寫本といふものをあげ「この本季吟翁が注本に妙壽院本とあるにその奥書同じければ同本なるべし（中略）寛永五巳辰神無月十五日武藏國江戸田安において書之とあり」と云つてゐるのと同本なのである。現在せる妙壽院本中、管見に入りたるは、刈谷圖書館所藏村上忠順舊藏の本、廣島市淺野圖書館所藏の本の二本である。又宮内省圖書寮に藏せらるゝ筈の一本もこの系統か。これ等には、「抄」に引きたる妙壽院本の奥書と同樣の奥書を有し、本文は、眞名を多くあてたる片假名をもつて記されてゐる。しかるに、これ等の二本には、妙壽院の手澤本の系統たることを證明すべき材料はないが、この稿筆者所藏の古寫本は、奥に

右妙壽院以自筆本一字不違朱句切假名一字不違書寫畢

と明記してあつて、妙壽院の原本か、或はそれに近い本を、最も忠實に摸寫したあとが歴然としてゐる。書寫の年代も、前記二書に比して、はるかに古く、誤脱もまた甚だ少い。本文は、片假名で書き、多く漢字をあててゐるが、漢字のあて方は、前述の二本と多少相違し、本文も異る所がある。この本文の相違は、前記二書が片假名から誤つたことがたしかで、從つて妙壽院本として成立したる後の傳寫の誤りである。

妙壽院本は、眞名をあまりに多くあてすぎ、穩當を缺くやうな附會も少くない。本文もまた類從本以上に正しいとは云へない。しかるに、それにもかかはらず、この本の發見は、土佐日記研究上重大な結果をもたらす。そのわけは、妙壽院本が、類從本と同樣に、亞槐本の一異本であつて、兩者相協けて、原本たる亞槐本の眞面目をうかがふことが出來るからである。

かく、亞槐本の正體が漸次明かにされて來ると、この本と定家自筆本との關係が興味深いものとなつて來る。なぜなれば、亞槐本も、定家自筆本も、同樣に貫之自筆本

から寫されたものであるからである。元來この二つの本は、貫之自筆本から書寫されたのであるから、嚴密に云へば本文に異同のない筈である。しかるに實際は同一系統の本であるか否か疑はしい位異同がある。そこで、二者の云ふ所の貫之自筆本といふものが同じ本であつたか否かが問題となるのである。

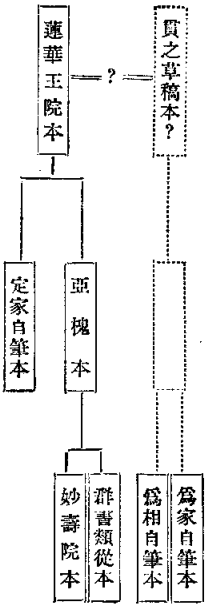
定家の見た本が、果して貫之の自筆本であつたか否かは分らないが、彼が卷末に摸寫した部分を見ると、拙劣な臨摹ながら、貫之時代の風格をしのぶことが出來る。定家の見た貫之自筆本は、先づ疑ひのないものであると信じたい。假りに然らずとするも、貫之の時代のものであることは確かである。蓮華王院本は、紀氏自筆であつたか否かは不明であるとしても、少くとも、定家の時代にさういふ傳說があり、定家がそれを認めたのである。定家の時代に、紀氏の筆蹟を摸し、又は僞筆を以つて眞蹟と詐稱する輩もあつたから、蓮華王院本以外に、貫之自筆と稱する土佐日記が別に存したかも知れない。亞槐本は、さういふ本を寫したのかも知れないが、將軍家に祕藏され

た本であると云ふから、よほど根據のある本であつたと想像したい。橘純一氏は、この二本の誤差の點につき、定家が貫之の筆蹟を臨摸した部分の草假名百十五字を五十音圖に配當し、蓮華王院本の書風の特質を究め、定家の書寫の誤りを指摘し、亞槐本と定家本とは、等しく蓮華王院本から寫されたものであると推定された。一體紀氏自筆本と稱するものは、可なり難解な古い假名が用ゐられてゐて、定家さへも讀み得ずして誤寫し、亞槐藤原なる人も「古代假名猶科蚪未憲臨寫有魯魚哉云々」と云つた位であるから、相方が書き誤り、寫し違へて、今日のやうな本が生れたと見るべきであらう。それにしても、明應の頃までは、その原本たる蓮華王院本が存してゐたのである。ああ、この本、今果していづこに在るか。

土佐日記現存諸本中、第三に注意すべきは、藤原爲家自筆本と、同爲相自筆本との系統の本である。この二つは、定家本の系統のものではない。相當本文が異つてゐる。御杖は「燈」に於て、爲相卿手書本といへる條に「その御すゑにして此本またそれと

異る所あるは異本をえたまひて寫し給へりしにや」と云つてゐる。爲家本の本文は由豆流の「考證」に引かれてゐるが、これは由豆流が「爲家卿の本は、おほかたは附注に同じ。されどいささかたがへる所見ゆるをば、みなもらさずかたへにあげつ」と云つてゐるやうに、人見卜幽の「土佐日記附注」の本文と大同小異のものであつたらしい。「附注」の本文といふのは、同書の凡例に「其間傳寫著惟多、故諸本字異矣、余適々見藤爲相卿手筆之本、以此爲據」とあつて、爲相筆本によつたのである。但し由豆流の本文校合は決して嚴密なものではなく、可なりいい加減のものである。校訂者所藏の一本は「這本爲相卿眞蹟也云々」とあり、かつ寛永丁丑の烏丸光廣の奥書ある本であるが、この本文は、奥書によれば、爲相本の系統と思はれるが、實際は「考證」に引きたる爲家本に類似してゐる。これ等の二系統の本の原本は、果して爲家、爲相二卿の眞筆であつたか否かは不明である。古筆家の常として、二條流の筆意あるものをば、悉く爲家、爲氏、爲相に歸する事情があるから、この二本も、もとは同一の本

であつたかも知れない。が、蓮華王院本の系統に對しては、全く別系統の異本である。今これ等の諸本を表示すれば、



の如くである。右諸本中、爲相本は「附注」によつて一般に知られてゐるわけであるが、實際は、「附注」そのものが稀本であるために、容易に見ることの出來ないものである。妙壽院本は前述の如く未だ何人もその全本を示じた學者はない。定家本は、かつて高知高等學校で活字にうつして刊行し、育德財團からは、玻璃版によつて複製された。右三本は、土佐日記研究上最も貴重なる傳本であるが故に、本文庫には、定

家本、妙壽院本の本文をかかげ、定家本（前田家藏本）と爲相本（附注本・靜嘉堂文庫本）との嚴密なる比校を試み、以つて學の研究に資することとした。

（五）内　容

土佐日記は、承平四年十二月二十一日、土佐國を舟出し、海路の辛苦をなめ、翌五年二月十六日京にかへり着くまでの事を書いてある。由豆流は、「この日記のはじめに、をとこもすなる日記といふものを、女もして見んとてするなりとあるよりして、ことをうらうへにいひて、ことばのあやをなせるをもて、もはら興としてはかゝれぬ」とて、作者の藝術的技巧をいたくほめてゐる。御杖は、貫之が女性に假託したる理由を、土佐に任ぜられたるを深く恥ぢ、不滿の情を洩らしたるにありとなし、秋成は「このぬしが此日記かける起本は京師より携へゆきし嬰兒の任國にて死去せしをこたびふり捨かへるをいたくかなしむより也」とて、本書執筆の動機をのべ、更に、かく妻子の事を悲しむが如きは、丈夫たるもののあるまじき行爲となし、特に女子に假託したの

であると云つてゐる。御杖は秋成の説を難じて、種々辯じてゐるが、要するに女性への假託といふ事はさして深い理由はなく、戯れてなされたものと見てよからう。山豆流が「家々の記錄といへるものは、みな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば、女のわざならず。されば男もすなる日記といふものを、女もして見んとて、とはことわれるなり。そをいま假名もてしるせるはめゝしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそ」と云つたのが穩當であらう。しかし、この日記著述の動機は、旅の苦しみと、珍らしさ、亡兒を思ふ悲しみ、京にかへるうれしさといふやうな情趣が主になり、その情趣を包む輕いユーモアが從となつてゐるやうに思はれる。悲しみにひたるのではなくて、悲しみを味はふといつた心持である。そこに、悠々として迫らざる世界がある。一説に、唐の李翺の來南錄などを見て書いたものではないかと云はれるが、必ずしもさうではあるまい。

(六)　歴史的地位

土佐日記は、假名文をもつて書かれた日記の最初のものである。新國字たる假名をもつて表現された文章が、漢文的表現に對して、如何に適切確實であるかが、この日記によつて證據立てられた。伊勢物語が、もと歌の詞書を主にしたやうなものであつて、次第に物語的形式を具へたものにちがひないとは、文體論を考へる場合に、いつでも氣のつく所である。新國字は、もと和歌にのみ用ゐられ、次いでその詞書に及び、次第にその用法が圓熟した後に、散文として日記文、物語文に及んできたものと思はれる。伊勢物語は、その詞書が物語形式に展開して行く過程を示すものとして、深い興味がある。土佐日記は、新國字による自由な散文的表現が、可なり圓熟して來た時代の作品であつて、この次の時代に、女流作家による假名文學の全盛を導き出す先驅となつた。この日記の文學としての特質は、第一に漢文學の影響の非常に多いことである。これは、時代そのものが、まだ新國字の使驅に自由でなかつた向きもあるが、主として作者その人が、漢學に素養の深い學究であつたからであらう。この傾向は、

惡い方には觀照の態度を概念的なものに曇らせ、表現の上に類型的な濁りを著しくさせたが、良い方には、文章を簡潔ならしめ、含蓄を深からしめた。この日記の文章は、他の女流の日記に比して、個性に徹した深刻味には劣るが、修辭上の技巧と、敍述の論理的であることでは群を拔いてゐる。そこに、紀貫之の學者又は文章家としての人格が反映してゐる。

土佐日記は、文學上の作品として重要なるのみならず、當時の交通、海賊、民間行事、民謠等、土俗又は風俗に關する資料でもあり、又、假名文發生時代の散文の一例として、當時の文法、語法等にも、他に類書が少いだけに貴重なる參考書である。

(七)　研　究

この日記の研究は、元和寛永の頃から盛になつたやうである。由豆流が、諸抄論の條であげた「土佐日記聞書」は、その最初のものである。小野山隱士槃柴と云へる人の「土佐日記見聞抄」は、年月がないから、成立の時は不明である。人見卜幽の「土

佐日記附注」は、萬治四年の跋があるから、北村季吟の「土左日記抄」と同年に成つたものであるらしい。そして、「抄」は「附注」の影響をいくらか受けてゐるやうに本居宣長は云つてゐるが、由豆流は、兩書に引用せられた和漢の古書の相通ぜざる點を指摘して、その然らざる由を辯じ、新玉出島神社所藏の季吟自筆の日記には、寛文元年十月十一日の條に、「附注」こそ、むしろ「抄」の影響を受けてゐると云つてゐる。寛永四年五月に刊行された土佐日記首書は、ほとんど「抄」のまゝのものである。藤原宇万伎は、契沖と眞淵との說をあはせ記した「土佐日記註」を書いた。又別に眞淵の說を記した本に上田秋成が序文を加へ、自らの說をあはせたのもある。又眞淵の說は、楫取魚彦によつて、別に書き記され、「土佐日記打聞」となつた。「註」と「打聞」とに、說の相違あるについて、由豆流は「魚彦がしるせるは縣居翁のはやくの說、宇万伎がしるせるは、後の說なるべし」と云つてゐる。次に岸本由豆流は「土左日記考證」をあらはして、諸抄を取捨選擇し、綿密な考證を試み、富士谷御杖は、「土佐日

記燈」を著し、特殊の言語學的見地から、詳細至らざるなき大研究を大成した。又香川景樹は、「創見土佐日記」を著して、精密なる考說を試みた。右の「考證」「燈」「創見」は、土佐日記研究史上特筆すべき大研究である。次に橘守部は、「舟の直路」、鹿持雅澄は「土佐日記地理辨」をものし、佐佐木弘綱は「土佐日記俚言解」を著して、啓蒙のためにつくす所があつた。明治以後の研究は、たいてい如上のものから一歩も出ないが、最近橘純一氏の發表せられた「定家本土佐日記の研究」と稱する論文は、古人の及ばざる本文校訂的研究に一歩を進めたものである。

土佐日記

男もすといふ日記といふ物を、女もして心みむとてするなり。

それの年、十二月の二十日あまり一日の日のいぬの時に門出す。

その由いさゝかに物に書きつく。

或人、縣の四年五年はてて、例の事共皆し了へて、解由などとりて住む館より出でて、舟に乘るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬ送りす。年來よくみえつる人々なむ、別れ難く思ひて、頻にとかくしつゝ、のゝしるうちに夜更けぬ。

一 といふたる
二 心ナシ
三 年一年の
四 にナシ
五 へに
六 みーしら
七 人々一人とも
八 つゝーて

二十二日に、和泉の國までと、たひらかに願ひ立つ。藤原の言實、舟路なれど馬のはなむけす。かみしなかも酔ひあきて、いとあやしく、潮海の邊にてあざれあへり。

二十三日。八木の康教といふ人あり。この人、國に必ずしもいひつかふ者にもあらずなり。これぞただはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心ある者は、恥ぢずぞなむ來ける。これはものによりてほむるにしもあらず。

二十四日。講師、馬のはなむけしにいでませり。ありとある上下童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字に踏み

一にナシ
二とナシ
三にーにと
四しなかもーなかしもなから
五りーる
六りーりて
七このナシ
八にーにて
九ひつかふ者ーてつかはるひと
一〇ずなりーさりき
一一これぞただーそれにたか
一二ずーぞ
一三ぞーき
一四來ーわたり
一五講師ー新司
一六でませりーまし
一七わらはーわらはへ
一八にーにも

てぞ遊ぶ。(一)

二十五日。守の館より、呼びに文もて來たなり。(二)呼ばれていたり(三)て、日ひと日、夜ひと夜、兎角(四)遊ぶやうにて明けにけり。

二十六日。猶守の館にてあるに、あるじしのゝしりて、郎等までに物かづけたり。(五)唐詩、(六)聲(七)あげていひけり。和歌、あるじも客人も、こと人もいひあへりけり。唐詩はこれにえ(八)書かず。和歌、あるじの守の詠めりける。

都出でて君にあはむと來しものを
來し甲斐もなく別れぬるかな

となんありければ、歸る前の守の詠めりける、(九)

一　ゼナシ
二　なーれ
三　たりーき
四　とかくーうとかんす
五　てナシ
六　しナシ
七　こえーこえに
八　えは
九　りけナシ

白妙の浪路を遠く行きかひて
　　我に似べきは誰ならなくに

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて、前の守、今のも、諸共におりて、今のあるじも、前のも、手とり交して、醉ひごとに、心よげなることとして出でにけり。

二十七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくするうちに、京にて産れたりし女子、くににて遽にうせにしかば、この頃のいでたちいそぎを見れど、何事も云はず、京へ歸るに、女子の亡きのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず、この間にある人の書きていだせる歌、

一 守―守も
二 今のあるじも
前―さきのも今
三 す―あ
四 ず―れす
五 き―きこと
六 び―み

都へと思ふものの悲きは(一)
歸らぬ人のあればなりけり

又、或時には、

あるものと忘れつゝ猶亡き人を
いづらと問ふぞ悲かりける

といひける間に、鹿兒の崎といふところに(二)、守のはらから、又ことを人、これかれ酒などもて追ひ來て、磯におりゐて(三)、別れ難きことをいふ。守の館の人々の中に、この來たる人々ぞ、心あるやうに云(五)はれほのめく。かく別れ難くいひて(六)、かの人々の、口網も諸持ち(七)にて、この海邊にて、になひいだせる歌、

一　もーに
二　にーにいたるに
三　てノ次ニ酒のみゐひてトアリ
四　きたーく
五　にーには
六　てつゝ
七　も原本はゝナレリ

惜しと思ふ人やとまるとあしがもの
　　うちむれてこそわれは來にけれ

といひてありければ、いといたく賞でて、行く人の詠めりける。

棹させど底ひも知らぬわだつみの
　　深き心を君に見るかな

といふ間に、かぢとり物のあはれも知らで、己し酒をくらひつれば、(一)はやくいなむとて、「潮滿ちぬ。風も吹きぬべし」と騒げば、舟に乘りなんとす。この折に、ある人々折ふしにつけて、からのうたども、(三)時に似つかはしきいふ。又、ある人、(四)西國なれど甲斐歌などいふ。かくうたふに、船屋形の塵も、(六)空ゆく雲もただよひぬとぞいふなる。

一　つ—け
二　くナシ
三　のナシ
四　き—きを
五　にしくに—に　しのくに
六　も—めちり

今宵浦戸に泊る。藤原の言實、橘の季衡、こと人々追ひ來たり。

二十八日。浦戸より漕ぎ出でて、大湊をおふ。この間に、はやく(一)の守の子、山口の千岑、酒よき物どももて來て、舟に入れたり。行く〳〵飲み食ふ。

二十九日。大湊に泊れり。醫師、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へて持て來たり。心ざしあるに似たり。

元日。猶同じ泊なり。白散を或者、夜の間とて、船屋形にさし挿めりければ、(二)風に吹きならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。(三)いもし、あらめも、(四)齒固もなし。(五)かうやうの物も(六)無き國なり。求めしもおかず。ただ押鮎の口をのみぞ吸ふ。(七)人々の口を、押鮎もし思

一 くーう
二 けーた
三 らーく
四 もナシ
五 はーさ
六 もナシ
七 人々ーこのすふ人々

ふやうあらんや。けふは京(一)のみぞ思ひやらるゝ。『こへ(二)の門(三)のしり(四)くへ(五)繩の鰡の頭、ひゝら木ら、いかにぞ』とぞいひあへ(六)なる。

二日。猶大湊に泊れり。講師(八)、物、酒おこせたり。

三日。同じ所なり。もし風浪の猶(九)しばしと惜しむ心やあらん、心もとなし。

四日。風吹けばえ出で立たず。昌連、酒、よき物奉(一〇)れり。このかうやうに物(一一)もて來る人に、猶しもはあらで(一二)、いさゝけわざせさす(一三)物もなし。賑はゝしきやうなれど、まくる心地す。

五日。風波止まねば、猶同じ所にあり。人々絶えずとぶらひにく。

六日。昨日の如し。

一 京―京に
二 へ―か
三 かどのナシ
四 へ―めの
五 のナシ
六 とぞ―なと
七 なナシ
八 講師―新司
九 猶ナシ
一〇 て―い
一一 に―の
一二 は―え
一三 す―せ

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日はあをむまなど思へど中斐なし。ただ浪の白きのみぞ見ゆる。かゝるほどに、人の家の、池と名ある所より、鯉はなくて鮒よりはじめて、河のも海のも、こと物ども、長櫃に擔ひ續けておこせたり。若菜ぞけふをばしらせたる。歌あり、その歌、

あさぢふの野邊にしあれば水もなき
池に摘みつる若菜なりけり

いともかしこし。

この池といふは、所の名なり。よき人の、男に付きて下りて住みけるなりけり。この長櫃の物は、みな人々に、童までにくれたれば、

一　などーを
二　ほどー間
三　どナシ
四　たりノ次ニわかたこにいれてきしなとんなにつけたりトアリ
五　歌ー歌は
六　もーお
七　こーか
八　けりナシ
九　々にナシ

飽き満ちて、舟子どもは腹鼓を打ちて海をさへ驚かして、波立てつべし。かくてこの間に事多かり。今日わりご持たせて来たる人、その名などぞや今思ひいでむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。兎角いひ〳〵て、「浪のたつなること」と、憂いひて詠める歌、

行く先に立つ白波の聲よりも
おくれて泣かむ我やまさらん

とぞ詠める。いと大聲なるべし。もて来たる物よりは、歌はいかがあらん。この歌をこれかれあはれがれども、一人も返しせず。しつべき人もまじれれど、これをのみいたがり、物をのみ食ひて、夜更けぬ。この歌主は、「またまからず」といひて立ちぬ。ある人の子の

一 は—に
二 なみ つなみ
三 けふ—今
四 る人—り
五 名など—人の名なに
六 と—く
七 ぞナシ
八 もナシ
九 もナシ
一〇 じ—じは
一一 り—りて
一二 はまたナシ

童なる、ひそかにいふ、「まろ、この歌の返しせん」といふ。驚きて、「いとをかしき事かな。詠みてむやは、詠みつべくは早云へかし」といふ。(一)まからずとて立ちぬる人を、待ちて詠まんとて求めけるを、夜更けぬとにや、やがていにけり。「そも〳〵いかが詠むだる」(二)と、いぶかしがりて問ふ。この童、流石に恥ぢていはず。強ひて問へば、いへる歌。

ゆく人もとまるも袖の涙川
みぎはのみこそ濡れまさりけれ

となん詠める。かくはいふものか。うつくしければにやあらん、いと思はずなり。童ごとにては何かせむ。(四)女、翁にをしつべし。悪し

一　ふ―ふに
二　や―やあらん
三　む―み
四　か―かは
五　女翁に―おきなをんなて

くもあれ、如何にもあれ、たよりあらばやらむとて、おかれぬめり。

八日。さはる事ありて、なほ同じところなり。今宵月は海にぞ入る。これを見て業平の君の、「山の端にげて入れずもあらなん」といふ歌なんおぼゆる。もし海邊にて詠まましかば、「波たちさへて入れずもあらなん」とも詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人の詠めりける。

照る月の流るゝ見れば天の河
出づる湊は海にざりける

とや。

九日のつとめて、大湊より奈半の泊を追はむとて漕ぎ出でけり。

一　もあーま
二　りてーれは
三　宵ー宵の
四　こよまー月いてたら
五　もナシ
六　りけナシ
七　とやナシ
八　のナシ

これかれたがひに、國のさかひのうちはとて、見送りに來る人あまたがなかに、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政らなん、(一)み館より出でたうびし日より、こゝかしこに追ひ來る。この人々ぞ(二)心ざしある人なりける。この人々の深き心ざしは、この海にも(三)おとらざるべし。

これより、今は漕ぎ離れて行く。これを見送らんとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎゆくまに〳〵、海のほとりに(五)とまれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれど甲斐なし。かゝれど、この歌をひとりごとにして止みぬ。

一　みナシ
二　うーま
三　ぞナシ
四　もーは
五　とまれ―とと

思ひやる心は海をわたれども
文しなければ知らずやあるらん

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の數いくそばく、いく千歳へたりと知らず。もとごとに浪うち寄せ、枝毎に鶴ぞ飛び交ふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人の詠める歌。

見わたせば松のうれごとに住む鶴は
千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、ところを見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜更けて、西ひんがしも見えずして、てけのことかぢとりの心に任せつ。

一 ろらーりけ
二 ぞーの
三 まに〳〵ーまゝに
四 んナシ
五 てーてい

をのこもならはぬはいとも心細し。まして女は、舟底に頭をつき當てて、ねをのみぞ泣く。かく思へば、舟子かぢとりは、舟唄うたひて、何とも思へらず。(一)そのうたふ唄は、(二)

春の野にてぞねをばなく、若薄にてきる〳〵つむだる菜を、親やまぼるらん、(四)姑や食ふらん、かへらや。(五)

よむべのうなゐもがな、(六)錢こはむ、そらごとをして、おぎのりわざをして、錢ももて來ず、おのれだに來ず。(七)

これならず多かれど書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、(八)心は少しなぎぬ。(九)

かくて行きくらして、泊に到りて、おきな人ひとり、老女ひとり、(一〇)(一一)

一 ずすそ
二 はナシ
三 きる　手きる
四 ぼーも
五 へ原木つトアリ
六 なーる
七 なー菜を
八 らずーみに
九 もナシ
一〇 てナシ
一一 ひとりナシ

あるがなかに、心地悪しみして、物もものしたはでひそまりぬ。

十日。今日はこの奈半の泊に泊りぬ。

十一日。あかつきに舟を出だして室津を追ふ。人みなまだ寝たれば、海の有様も見えず。ただ月を見てぞ、西ひんがしをば知りける。かゝる間に、みな夜明けて手洗ひ、例の事どもして晝になりぬ。今しはねといふ所に來ぬ。若き童、この所の名を聞きて、「はねといふ所は、鳥の羽のやうにやある」といふ。まだ幼き童のことなれば、人々笑ふ時に、ありける女童なん、この歌を詠める。

まことにて名に聞く所羽根ならば
飛ぶがごとくに京へもがな

一　ガナシ
二　みーま
三　たーたま
四　やうーたま

とぞいへる。男も女も、いかでとく京へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて人々忘れず。この羽根といふ所とふ童のついでにぞ、又昔の人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。今日はまして、母の悲がらるることは、下りし時の人の數足らねば、ふる歌に、「數はたらでぞ歸るべらなる」といふことを思ひ出でて、人の詠める。

世中に思ひやれども子をこふる
思にまさる思なきかな

といひつゝなん。

十二日。雨降らず。文時、惟茂が舟の遲れたりし、奈良志津より

一 の―行
二 がらるる―む
三 る―るき
四 や―あ

室津に來ぬ。

十三日のあかつきに、いさゝかに雨降る。しばしありて止みぬ。女これかれ、ゆあみなどせんとて、あたりのよろしき所におりてゆく。海を見やれば、

雲もみな浪とぞ見ゆるあまもがな

いづれか海と問ひて知るべく

となん歌詠める。さて十日あまりなれば、月おもしろし。舟に乘り始めし日より、舟には紅濃く、よき衣着ず。それは海の神におぢてといひて、なにのあしかげにことづけて、ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、心にもあらぬはぎにあげて見せける。

一　のナシ
二　にナシ
三　女ー男女
四　ひーふ
五　りーりて出
六　と　も
七　ひーみ
八　にーにも

十四日。あかつきより雨降れば、同じ所に泊れり。舟君節忌す。精進物なければ、午時より後に、かぢとり昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけておちられぬ。かゝることなほありぬ。かぢとり又鯛もて來たり。米、酒などくる。かぢとりけしき惡しからず。

十五日。今日あづき粥煮ず。くちをしく、なほ日の惡しければ、ねざるほどにぞ、けふ二十日あまり經ぬる。徒に日を經れば、人々海をながめつゝぞある。女の童のいへる。

たてばたつゐねれば又ゐる吹く風と
浪とは思ふどちにやあるらん

一 まーまの
二 りーりの
三 なとーしはしは
四 ふーおく
五 ゼナシ

いふ甲斐なき者の、いへるには似つかはし。

十六日。風浪止まねば、なほ同じ所に泊れり。ただ海に浪なくして、いつしか御崎といふところ渡らんとのみなん思ふ。風浪とにに止むべくもあらず。或人の、この浪たつを見てよめる歌。

霜だにもおかぬ方ぞといふなれど
浪のなかには雪ぞ降りける

さて舟に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日。くもれる雲なくて、あかつき月夜いともおもしろければ、舟を出だして漕ぎ行く。この間に、雲の上も、海の底も同じ如くに

一 は…はいと　二 に…も　三 く…くなり　四 こ…す

なんありける。むべも昔のをとこは「棹は穿つ波のうへの月を、舟はおそふ海のうちのそらを」とはいひけむ。聞きざれに聞けるなり。

又、或人の詠める歌。

水底の月のうへより漕ぐ舟の
棹にさはるは桂なるらし

これを聞きて、ある人の又詠める。

影見れば浪の底なるひさかたの
空漕ぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明け行くに、かぢとりら「黒き雲遊にいで來ぬ。風吹きぬべし。み舟返してむ」といひて舟かへる。この

一 とーの
二 つ原本ヘトナレリ
三 たナシ
四 たナシ
五 れーし
六 歌ナシ
七 かくーとから
八 きナシ
九 かへしーとゝめ

(一)間雨降りぬ。いとわびし。

十八日。なほ同じ所にあり。海荒ければ舟出ださず。この泊、遠く見れども、近く見れどもいとおもしろし。かゝれども苦しければ、(二)何事もおもほえず。男どもは、心やりにやあらん、唐詩(三)などいふべし。舟も出ださで、いたづらなれば、或人の詠める。

磯ぶりのよする磯には年月を(四)
いつともわかぬ雪のみぞ降る

この歌は常にせぬ人のことなり。又、人の詠める。(五)

風による浪の磯には藻も
春もえしらぬ花のみぞ咲く

一　間―間に
二　苦し―なこ
三　もナシ
四　を―も
五　にナシ

この歌どもを、すこしよろしと聞きて、舟のをさしけるおきな、(一)月ごろ苦しき心やりに(二)詠める。

立つ浪を雪か花かと吹く風ぞ(四)
寄せつゝ人をはかるべらなる

この歌どもを、人のなにかといふを、或人(五)聞き耽(六)りて詠めり。(七)その歌、詠める文字、三十文字あまり七文字、人みなえあらで笑ふやうなり。歌主いと氣色惡しくて怨(八)ず。まねべどもえまねばず。書けりともえよみすへ(九)難かるべし。今日だにかくいひがたし。まして後(一〇)(一一)にはいかならん。(一二)

十九日。日惡しければ、舟出ださず。

一 を―さほ
二 月ころ―月ひころの
三 に―にとて
四 ぞ―に
五 人―人の又
六 けナシ
七 り―る
八 ゑ―えま
九 す―あ
一〇 く―う
一一 後に―そののち
一二 な―かあ

二十日。昨日のやうなれば舟出ださず。みな人々うれへ歎く。苦しく心もとなければ、ただ日の經ぬる數を、今日幾日、二十日、三十日と數ふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。(一)いも寢ず。二十日の月出でにけり。(二)山の端もなくて、海のなかよりぞ出で來る。(三)かやうなるを見てや、昔安倍の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて、歸り來ける時に、(四)舟に乘るべき所にて、かの國人馬のはなむけし、別れ惜みて、かしこの唐詩作りなどしける、(五)飽かずやありけん、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麿のぬし、「わが國はかゝる歌をなん、(六)神世より神もよむたび、(七)今は上中下の人も、(八)かやうに別れ惜み、(九)喜もあ(一〇)

一　いー夜はい
二　月ー夜の月
三　かーから
四　けーた
五　るーんや
六　やありーおほえ
七　はーに
八　をナシ
九　よむたひーえいし給ふ
一〇　かーから
一一　もナシ

り、悲びもある時には詠む」とて、詠めりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

一びーみ

とぞ詠めりける。かの國人、聞き知るまじうおもほえたれども、こ
との、男文字に様を書き出して、こゝのことば傳へたる人にいひ知
らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになん賞でけ
る。唐土と、この國とはこと異るものなれど、月の影は同じことな
るべければ、人の心も同じことにやあらん。

二國　國の
三うく
四めナシ
五もナシ
六のーの心を

さて今、そのかみを思ひやりて、或人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど

浪より出でて浪にこそ入れ

二十一日。卯の時ばかりに舟出だす。みな人々の舟出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。(一)朧げの願によりてにやあらむ、風も吹かず、よき日いできて漕ぎ行く。この間に使はれんとて、つきて來る童あり。それがうたふ舟唄、

なほこそ國の方は見やらるれ、わが父母ありとし思へば、かへらや。(二)

とうたふぞあはれなる。

かくうたふを聞きつゝ漕ぎ來るに、黑鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。その岩(三)のもとに浪白くうち寄す。かぢとりのいふやう、「黑

一　れナシ

二　ら―らしば

三　岩―岩ほ

き鳥のもとに白き浪をよす」とぞいふ。そのことば何とにはなけれ(一)(二)(三)ども、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねばとがむるなり。(四)(五)

かくいひつゝ行くに、舟君なる人、浪を見て、國よりはじめて、海賊返報せむといふなることを思ふうへに、海の又恐しければ、頭もみな白けぬ。なゝそぢやそぢは海にある物なりけり。(六)

わが髪の雪と磯べの白浪と
いづれまされり沖つ島守

かぢとりいへ。(七)(八)

二十二日。よむべの泊より、こと泊を追ひて行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなるをの童、年よりは幼くぞある。この童、舟を漕ぐ

一　す―する
二　そーこ
三　けーむ
四　もナシ
五　えた―ゆ
六　海―海
七　か―とか
八　へ―へり

まゝに、山も行くと見ゆるを見て、あやしきこと歌をぞ詠める、そ(一)の歌、

漕ぎてゆく舟にて見ればあしびきの(二)
山さへ行くを松は知らずや

とぞいへる。をさなき童の事にては似つかはし。けふ海荒げにて(三)、磯に雪ふり、浪の花咲けり。或人の詠める、

浪とのみひとつに聞けど色見れば
雪と花とに紛ひける哉(四)

二十三日。日照りて曇りぬ。このわたり海賊の恐(五)りありといへば、神佛を祈る。

一　まゝに―まに
二　その歌ナシ
三　てーし
四　にてナシ
五　けーぬ
六　のナシ

二十四日。昨日の同じ所なり。(一)

二十五日。かぢとりらの「北風悪し」といへば舟出ださず。海賊追ひ來といふこと、絶えず聞ゆ。(二)

二十六日。まことにやあらん、海賊追ふといへば、夜中ばかり舟を出だして漕ぎ來る途に、たむけする所あり。かぢとりして幣たいまつらするに、幣のひんがしへ散れば、かぢとりの申して奉ることは、「この幣の散るかたに、み舟速に漕がしめたまへ」と申して奉るを聞きて、或めの童の詠める、(七)

わだつみのちぶりの神にたむけする
幣の追風やまず吹かなん

一　のナシ
二　きこゆ―いふ
三　ふ―ひく
四　り―りより
五　んナシ
六　てナシ
七　る―ろこれ
八　めのナシ

とぞ詠める。

この程(一)に風(二)のよければ、かぢとりいたく誇りて、舟に帆(三)あげなど喜ぶ。その音を聞きて、童も翁も、いつしかと(四)思へばにやあらん、いたく喜ぶ。このなかに、淡路のたうめといふ人の詠める歌、

追風の吹きぬる時は行く舟も(五)
帆手うちてこそ嬉かりけれ

とぞ。(六)ていけのことにつけて(七)祈る。(八)

二十七日。風吹き、浪荒ければ、舟出ださず。これかれかしこく歎く。男たちの唐詩(九)に、「日をのぞめば都遠し」などいふなる事のさまを聞きて、或女の詠める、(一〇)

一 ほど―間
二 のナシ
三 あ―か
四 と―とし
五 も―の
六 ぞナシ
七 いけ―そ
八 の―へ
九 のノ次ニ心なくさめにトアリ
一〇 る―る哥

日をだにもあま雲ちかく見る物を
　　都へと思ふ途のはるけさ

又、或人の詠める、

吹く風の絶えぬかぎりし立ち來れば
　　波路はいとど遙けかりけり

日ひと日風止まず。爪はじきして寢ぬ。(一)

二十八日。夜もすがら雨も止まず。(二)今朝も。

二十九日。舟出だして行く。うら〳〵と照りて漕ぎ行く。爪の長(三)くなるを見て、日を數ふれば、今日は子の日なりければきらず。む(四)月なれば、京の子の日のこといひいでて、松もがなといへど、海な(五)

一　き―きを
二　もナシ
三　の―いと
四　な―なりにた
五　松―小松

かなれば難しかし。(一)女の書きて出だせる歌、

おぼつかな今日は子の日かあまならば
　　海松をだにひかましものを

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいかがあらん。(二)又、或人の詠(三)める歌、

今日なれど若菜も摘まず春日野の
　　わが漕ぎわたる浦になければ

かくいひつゝ漕ぎゆく。おもしろきところに舟を寄せて、「こゝや何處」と問ひければ、土佐の泊といひけり。(四)昔土佐といひけるところに住みける女、この舟にまじれりけり。そがいひけらく、「昔しばし

一　女　ある女
二　又ナシ
三　りーる
四　れナシ

ありし所のなくひにぞあなる、あはれ」と云ひて、詠める歌、

年ごろを住みし所の名にしおへば

來よる浪をもあはれとぞ見る

とぞいへる。

三十日。雨風吹かず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜中ばかりに舟を出だして、阿波の水門を渡る。夜中なれば、西ひんがしも見えず。男、女、辛く神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の時ばかりに沼島といふ所を過ぎて、たな川といふ所を渡る。辛く急ぎて、和泉の灘といふところに到りぬ。

今日海に浪に似たるものなし。神佛の惠かうぶれるに似たり。今

一　くーら
二　へーは
三　見る―おもふ
四　とぞいへるナシ
五　みと―みなと
六　んナシ
七　みと―みなと
八　かうぶれる―あいれみ

日舟に乘りし日より數ふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊物ならず。

二月一日。あしたの間雨ふる。(一)午時ばかりに止みぬれば、和泉の灘といふ所より出でて漕ぎ行く。海の上昨日のごとくに風浪見えず。黑崎の松原を經て行く。所の名は黑く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝の色は蘇芳に、(二)五色にいまひと色ぞ足らぬ。

この間に、今日は箱の浦といふ所より綱手ひきて行く。かく行く間に、或人の詠める歌、

玉くしげ箱の浦波たたぬ日は
海を鏡とたれか見ざらむ

一　ろ―り
二　に―にて

又舟君のいはく、「この月までなりぬること」と歎きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

ひく舟の綱手の長き春の日を、

よそかいかまでわれは經にけり

聞く人の思へるやう、「なぞただごとなる」と、密にいふべし。「舟君の辛くひねり出だして、よしと思へることを、怨じもこそしたべ」とて、つゝめきて止みぬ。遽に猶浪高ければとどまりぬ。

二日。雨風止まず。日ひと日夜もすがら、神佛を祈る。

三日。海の上昨日のやうなれば舟出ださず。風の吹くこと止まねば、岸の浪たちかへる。これにつけても詠める歌、

一 ふ―みふ
二 る―る哥
三 ひ―ゆ
四 ひ―み
五 てナシ
六 よし―ふ
七 を―たわらは
八 たナシ
九 猶―風
一〇 もナシ

緒をよりて甲斐なき物は落ちつもる
涙の玉を貫ぬなりけり

かくて今日暮れぬ。(一)(二)

四日。かぢとり「今日風雲のけしき(三)甚(四)悪し」といひて、舟出ださずなりぬ。しかれどもひねもすに浪風立たず。このかぢとりは、日もえ計らぬかたぬなりけり。(五)

この泊の渚には、くさぐさの麗しき貝、石など多かり。かゝれば、ただ昔の人を戀ひつゝ、舟なる人の詠める、(六)

よする浪うちもよせなんわがこふる
人わすれ貝おりて拾はむ

一　ふーふも
二　ぬノ次ニすゝろにのみる日をくらすかなトアリ
三　雲ナシ
四　きノ次ニ雲のさまトアリ
五　ら―らは
六　を―たのみ

といへば、或人堪へずして、舟の心やりに詠める、

忘れ貝拾ひしもせじ白玉を

戀ふるをだにもかたみと思はん

となんいへる。女どのためには、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけんを人いはむや。されども「死し児顔よかりき」といふやうもあり。なほ同じ所に日を經ることを歎きて、或女の詠める歌、

手をひでて寒さもしらぬ泉にぞ

汲むとはなしに日ごろ經にける

五日。今日辛くして、和泉の灘より小津の泊を追ふ。松原目もはるばるなり。これかれ苦しければ詠める歌、

一 へ―へれ
二 人―人の
三 を―ものを
四 もナシ
五 死―しに
六 これかれ―かれこれ

行けど猶行きやられぬは妹がうむ[一]
をづの浦なる岸の松原

かくいひつゝ來る程に、「舟とく漕げ、日のよきに」と、もよほせば、かぢとり、舟子どもにいはく「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出で來ぬさきに綱手はやひけ」といふ。この言葉の歌のやうなるは、かぢとりのおのづからの言葉なり。かぢとりは、うつたへに、われ歌のやうなること云ふとにもあらず。聞く人の「あやしく歌めきても云ひつるかな」とて書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。

「今日浪な立ちそ」と、人々終日に祈るしるしありて、風浪たた

一　ぬ—ね
二　もナシ

ず。今し、鷗(一)むれゐてあそぶ所あり。京の近づく喜のあまりに、或童の詠める歌、

祈り來る風間ともふをあやなくも(二)
鷗さへだに浪と見ゆらん(三)

といひて行く間に、石津といふところの松原おもしろくて、濱遼遠(四)し。又、住吉のわたりを漕ぎゆく。或人の詠める歌(五)、

今見てぞ身をも知りぬる住の江の(六)
松よりさきにわれは經にけり

こゝにむかしへ人の母、ひと日片時も忘れねば詠める、

住の江に舟さしよせよ忘れ草(七)

一 鷗　鷗も
二 も―おも
三 も―に
四 遼―いと遠
五 歌ナシ
六 も―は
七 よ―て

しるしありやと摘みて行くべく

となん。うつたへに忘れなむとにはあらで、こひしき心地しばしやすめて、又も戀ふるちからにせむとなるべし。

かくいひてながめつづくる間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども〳〵、しりへ退きに退きて、ほと〳〵しくうちはめつべし。かぢとりのいはく、「この住吉の明神は、れいの神ぞかし。欲しき物ぞおはすらん」とは今めくものか。さて「幣を奉り給へ」といふ。いふに從ひて幣たいまつる。かくたいまつれど、もはら風止まで、いや吹きに、いや立ちに、風浪の危ふければ、かぢとり又いはく、「幣にはみ心のいかねば、み舟も行かぬなり。なほうれしと思ひたぶべき

一はナシ
二たてーたい
三いふナシ
四てナシ
五どーども
六いーゆ
七たー給
八べきーばかり
の

物たいまつりたべ」といふ。(一)また、いふに従ひて、「いかがはせむ」(二)とて「眼もとそふたつあれ、ただひとつある鏡をたいまつる」とて、海にうちはめつればくちをし。さればうちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、或人の詠める歌、(三)

ちはやぶる神の心のある〻海に
鏡を入れてかつ見つるかな(四)

いたく、住の江、忘れ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつら〳〵、鏡に神の心をこそは見つれ。かぢとりの心は神のみ心なり。(五)(六)

六日。澪標のもとよりいでて、難波つきて、河尻に入る。みな人(七)

一　た―給
二　またナシ
三　ごと―やうに
四　の―を
五　江―江の
六　り―りけり
七　つ―の津を

々、女、おきな額に手をあてて喜ぶことふたつなし。かの舟醉の淡路の島のおほい子、京近くなりぬといふを喜びて、舟底より頭をもたげて、かくぞいへる、

いつしかといぶせかりつる難波潟
葦漕ぎそけてみ舟來にけり

いと思ひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に、心地なやむ舟君いたく賞でて、舟醉したうべりしみ顏には似ずもあるかな」といひける。

七日。今日河尻に舟入り立ちて漕ぎのぼるに、河の水干て惱みわづらふ。舟ののぼることいと難し。かゝる間に、舟君の病者、もと

一 女おきな―おきたなんな
二 ぬ―ぬる
三 げ―けさせ
四 の―のかく
五 君―君を
六 たう―給ふ
七 りし―ら
八 は似ずも―ニはあらずし
九 日―日は

よりこちごちしき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども、淡路(一)たうめの歌に賞でて、都誇りにもやあらん、辛(二)くしてあやしき歌ひねり出だせり。その歌は、(三)

來と來ては河のぼり路(四)の水を淺み
　舟もわが身もなづむ今日かな

これは病をすれば詠めるなるべし。ひと歌にことのあかねば、いまひとつ、

とくと思ふ舟惱ますはわがために
　水の心の淺きなりけり

この歌は　京近くなりぬるよろこびに堪へずして云へるなるべし。

一　淡路―淡路の
二　く―う
三　はナシ
四　路　江

淡路の御の歌におとれり。「ねたき。いはざらましものを」とくやしがるうちに、夜になりて寝にけり。

八日。なほ河のぼりになづみて、鳥養のみ牧といふ遊に泊る。今宵舟君れいの病起りていたく悩む。

或人あざらかなるもの持て來たり。米して返りごとす。をとこども密にいふなり、「飯粒して鰹釣る」とや。かうやうのこと所々にあり。今日節忌すれば魚用ゐず。

九日。心もとなさに、明けぬから、舟をひきつゝのぼれども、河の水なければ、ねざりにのみぞねざる。この間に、和田の泊のあがれの所といふところあり。米、魚など請へばおこなひつ。かくて舟

一 夜になり―入
二 とまる―とゝまる
三 あざら―いさき
四 さ―き
五 れども―ると すれと
六 所ナシ
七 あり―に

ひきのぼるに、渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には松の木どもあり。なかの庭には梅の花咲けり。こゝに人々のいはく、これ昔名高く聞えたる所なり。故惟喬の親王のおほんともに、故在原の業平の中將の「世の中に絶えて櫻の咲かざらば春の心はのどけからましし」といふ歌詠めるところなりけり。今興ある人、所に似たる歌詠めり。

千代へたる松にはあれどいにしへの
聲の寒さはかはらざりけり

又、或人の詠める。

一 といふ所ナシ
二 そこ
三 りーりけり
四 なかーまへ
五 れーれは
六 にーにて
七 所ー心
八 りーる
九 聲の一風に

君こひて世をふるやどの梅の花
昔の香にぞ猶にほひける

といひつゝぞ、京の近づくを喜びつゝ上る。かく上る人々のなかに、一京より下りし時に、みな人、子ども無かりき。いたれりし國にてぞ、子産める者どもありあへる。(一)人みな舟の泊るところに、子を抱きつつ降り乘りす。(二)これを見て昔の子の母、かなしきに堪へずして、

無かりしも有りつゝ歸る人の子を
ありしもなくて來るが悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかがあらん。かう樣のことも歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土もこゝも、思ふこ

一 人みな―みな人
二 乘り―のぼり

とに堪へぬ時のわざとか。今宵宇土野といふところに泊る。(一)

十日。障ることありて上らず。

十一日。雨いさゝかに降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方に山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ。これを聞きて、喜びて人々拝み奉る。山崎のはし見ゆ。嬉しきことかぎりなし。こゝに相應寺の邊に、しばし舟をとどめて、(二)とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。(三)或人この柳のかげの、(四)河の底にうつれるを見て詠める歌。(五)

さざれ浪よするあやをば青柳の
かげの絲して織るかとぞ見る(六)

一 とまる―とゝまれり
二 いさゝかに―すこし
三 どナシ
四 岸―岸の
五 のナシ
六 る―ゆ

十二日。山崎にあり。(一)

十三日。なほ山崎に。

十四日。雨降る。今日車京へとりにやる。

十五日。今日車ゐて來たり。(二)(三)舟のむづかしさに、舟より人の家に移る。この人の家、喜べるやうにて、あるじしたり。このあるじのまたあるじのよきを見るに、うたて思ほゆ。いろ〳〵に返事す。家の人の出で入り、にくげならずゐやゝかなり。

十六日。今日のようさつがた、京へ上るついでに見れば、山崎の(四)小櫃の繪も、まがりの大路のかたも變らざりけり。賣り人の心をぞ(五)(六)(七)知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじした

一 あ―とまれ
二 ゐ―も
三 たり―たれり
四 うさ―ふ
五 の―のたなゝる
六 おほぢ―ほら
七 り―る

り。かならずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、(一)歸る時ぞ、人はとかくありける。これにも返事す。(二)

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂河、月のあかきにぞ渡る。人々のいはく、「この河飛鳥河にあらねば、淵瀬さらに變らざりけり」といひて、或人の詠める歌。(三)

久方の月におひたる桂河
　底なるかげも變らざりけり

又、或人のいへる。

天雲の遙なりつる桂河
　袖をひでてもわたりぬるかな

一　歸―く

二　も―めそれにも

三　に―にも

又或人詠めり。(一)

桂河わが心にもかよはねど
同じ深さに流るべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて(二)所々も見えず。京に入り立ちて嬉し。

家に到りて門に入るに、月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふ甲斐なくぞ毀れ壊れたる。(三)家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、望みて預かれるなり。(四)さるは、たより毎に、物は絶えず得させたり。(五)今宵、かゝることと、聲高にものも云はせず。いとは、(六)つらく見ゆ(七)

一　りーりし
二　てーてくれば
三　壊れナシ
四　原本ニハにトアリ
五　りーりけり
六　はーも
七　はナシ

れど、心ざしはせむとす。

さて池めいて窪まり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片へはなくなりにけり。今生ひたるぞ交れる。おほかたの、みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきがうちに、この家にて産れし女ごの諸共に歸らねば、いかがは悲しき。舟人もみな子たかりてのしる。かゝるうちに、なほ悲しきに堪へずして、密に心知れる人人いへりける歌。

うまれしも歸らぬ物をわが宿に
小松のあるを見るがかなしさ

一　のナシ
二　たかり―抱
三　き―み
四　ひ―み
五　人々―人と

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、又かくなん。(一)

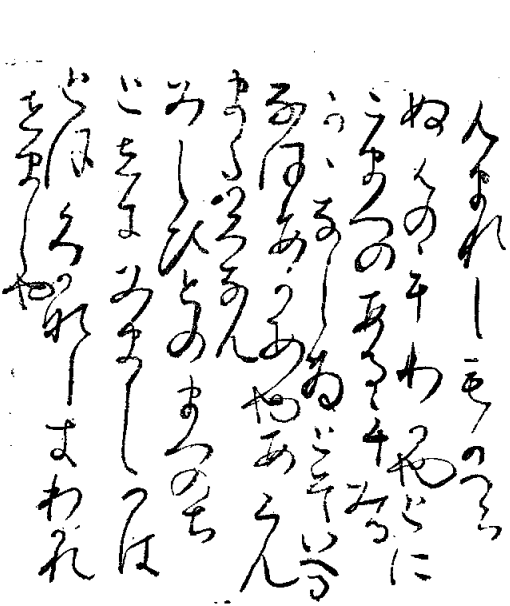
見し人の松の千年に見ましかば(二)

遠くかなしき別せましや

忘れ難く、くちをしきこと多かれど、え盡さず。とまれかうまれ、(四)

とくやりてん。

一　とぞいへる　底本ニナキモ卷末臨ノ本文ニヨリテ入レタリ
二　かくナシ
三　の―を
四　う―く



かゝれるこゝちすし
まゝとおほゆれど
あへしらはあとまれ
うまれとくわゝてん

なゝ知も手跡を躰以形優劣を
諷詐を單ハ他手跡多轉も筆
不謂宗旨

文暦二年乙未 五月十三日乙巳 老病中
雖眼必盲不慮之外見紀氏自筆
今 道善院寶藏本
牡紙白紙 不打 無坪 高一尺一寸二分許 廣
一尺七寸二分許 紙也 廿六枚 無軸
表紙續白紙一枚 諦聊折返不立竹 無紙
有外題 土佐日記 貫之筆
具出樣 和平 非別行 定行之 出之
聊有闕字 寄下無窮字 出後詞

不堪感興自古爲之昨今二十日終功

桑門明靜

紀氏

延長八年任土左守

在國載五年六年之内

矣卒四甲午五乙未年事人

今年乙未歷三百一年紙不朽

損之字又鮮明也

不讀得所々多只任本古也

土佐日記

男モ爲ナル日記ト云物ヲ女モシテ見ントテスル也

某ノ年ノ十二月ノ二十日餘リ一日ノ日戌ノ時門出ス其由聊物ニ書付或人縣ノ四年五年果テ例ノ叟トモ皆爲終テ解由ナト取リテ住館ヨリ出テ舟ニ乘ヘキ處ヘ渡ル彼是知知ラズ送リス年比ヨリ具シツル人々ナン別カタク思ヒテ其日シ限ニトカクシツヽノヽシル内ニ夜深ヌ

二十二日和泉ノ國マテトタヒラカニ願立藤原ノ言實舟路ナレトモ馬ノ餞ス守ナリシモ醉過テ最怪潮海ノ邊ニテアサレアヘル

二十三日山康教ト云人有此人國ニ必スシモイヒ使者ニモアラス是レソタヽハシキ樣ニテ馬ノ餞シタル守カラニヤアラン國ニ人ノ心ノ常トシテ今ハトミエサナルヲ心有者ハ愧過ナン來ケル是ハ物ニ依リテ譽ルニシモアラス

二十四日好士馬ノ餞シニ出在リ有アル上下童マテ醉シレテ一文字ヲタニ知ヌ者シカ足ハ十文ニ蹈テソ遊ラ

二十五日守ノ館ヨリ呼ニ文以來レリ呼レテ至リテ日一日夜一夜トカク（校訂者云以上原本に缺くるを以て刈谷圖書館藏本にて補へり）

遊フヤウニテ明ニケリ

廿六日尙守ノ館ニテ主ノヽシリテ郎數多ニ物カツケタリ唐詩聲アリテ云ケリ倭哥有シモ賓モ殊人モ云合リケリ唐詩ハ是ニハ書ス倭哥主ノ守ノ詠ケル

京出テ君ニ逢ント來物ヲ來甲斐モナク別レヌル哉

トナンアリケレハ歸ル前ノ守ノ詠ル

白妙ノ浪路ヲ遠ク行違テ我ニ似ベキハ誰ナラナクニ

殊人々ノモ有ケレト賢キモナカルヘシトカク云テ前ノ守今ノモ諸共ニ下テ今ノ主モ前ノモ手取交テ酔言ニ快ゲナル言シテ出去ケリ

廿七日大津ヨリ浦戸ヲサシテ盪出カクアル内ニ京ニテ生レタリシ女兒爰シテ俄ニ失ニシカハ此比ノ出立テ急ヲ見レト何事モ云ス京ヘ歸ルニ女兒ノナキノミソ哀戀アル人々モエ堪ス此間ニアル人ノ云テ出セル哥

京ヘト思フヲ物ノ悲キハ歸ラヌ人ノアレハナリケリ

又アル時ニハ

アル物ト忘ツヽナヲ亡人ヲイツクト問ソ悲シカリケル

ト云ケル間ニ鹿兒崎ト云處ニ守ノ兄弟マタ殊人是彼酒ナト以テ追來テ磯ニ下テ別レ難キ事ヲ云守ノ館ノ人々ノ中ニ此ノ來ル人々ソ心アルヤウニハイハレホノメクカク別レ難ク云テ彼ノ人々ノタチアミモヽロモチニテ此海邊マテニナヒイタセル哥

惜ト思フ人ヤトマルト足鳥ノウチ群テコソ我ハ來ニケレ

ト云テアリケレハ最イタク愛行人ノ詠

棹刺ト底ヒ。知ヌ海ノ深キ心ヲ君ニ見ル哉

ト云フ間ニ楫取者ノ哀レモ知ラテ已シ酒ヲクラヒツレハ早ク去トテ潮滿ヌ風モ吹ヌヘシト騒ハ舟ニ乘ナントス此ヲリニアル人々ヲリフシニ付テ唐詩トモ時ニ似合キヲ云マタアル人西國ナレト甲斐哥ナト云カクウタフニ舟屋形ノ塵モ散空行雲モ漂ヌトソ云

ナル今夜浦戸ニ泊藤原ノ言實橘ノ季衡コト人々追來リ

廿八日浦戸ヨリコキ出テ大湊ヲ追此間ニ早ノ守ノ子山口ノ千峯酒好物モテ來テ舟ニ入タリ行々飲食

廿九日大湊ニ泊レリ醫士フリハヘテ屠蘇白散酒加ヘテ以來タリ志アルニ似タリ

元日ナヲ同泊ナリ白散ヲアル者夜ノ間トテ舟屋形ニサシハサメリケレハ風ニ吹ナラサセテ海ニ入テエ飲スナリヌ芋モ海帶モ坂田メモナシサウヤウノ物ナキ國也求メモ置ス唯オシ鮎ノクチヲノミソ居此逢人々ノクチヲオシ鮎若シ思フヤウヤアランヤ今日ハ京ノミソ思ヒヤラル、九重ノ門ノ端公之繩ノ鰡魚ノ首ヒヽラ木等如何ソトソ云合ル

二日ナヲ大湊ニ泊リ講師物酒贈タリ

三日同シ處ナリ若風浪ノシハシト惜ム心ヤアラン心元ナシ

四日風吹ハエ出立ス昌連酒好物献レリ此カウヤウ物モテクル人ニナヲシモエアラテイサ酒態セサセ物モナシ贈シキヤウナレトマクル心地ス

五日風濤止ネハナヲ同處ニアリ人々絶ス訪ヒニク

六日昨日ノ如シ

七日ニナリヌ同湊ニアリ今日ハ白馬ノ思ヘト甲斐ナシ唯波ノ白キヲ見ユルカヽル間ニ人ノ家ノ池ト名アル處ヨリ鮎ハ無テ鯽ヨリ始テ河ノモ海ノモ異物モ長櫃荷繼テ贈タリ若菜ソ今日ヲハ知セタル哥アリ其哥

淺茅生ノ野邊ニシアレハ水モナキ池ニ摘ツル若菜ナリケリ

最オカシカシ此池ト云ハ處ノ名ナリ善人ノ男ニ付テ下リテ住ケルナリ此長櫃ノ物ハ皆人童マテニクレタレハ飽滿テ舟子トモハ腹鼓ヲ擊テ海ヲサヘ驚シテ波立ツヘシカクテ

此間ニ事多カリ今日破籠持セテ來タル人名ナトソヤ思ヒ出ン此人哥ヨマント思フ心アリテナリケリトカク云〳〵テ波ノ立ナルコトト憂云テ詠ル哥

行サキニ立白波ノ聲ヨリモ後レテ泣ン我ヤ勝ン

トソヨメル最大聲ナルヘシモテ來ル物ヨリハ哥ハイカヽアラン此哥ヲ是彼哀カレトモ獨モ返セスシツヘキ人モ雜レヽト是ヲノミイタカリ物飲食テ夜深ヌ此哥主ナシマタマカラズト云テ立ヌ或人ノ子ノ童ナル竊ニ云麻呂此哥ノ返セント云驚テ最ヲカシキ事哉ヨミテンヤハ詠ツヘクハヘヤ云カシト云マカラストテ立ヌル人ヲ待テヨマントテ求ケルヲ夜深ヌトヤアリケンヤカテイニケリソモ〳〵イカヽヨンタルト訝シカリテ問フ此童サスカニ愧テイハス强テ問ハイヘル哥

行人モトマルモ袖ノ涙川水涯ノミコソヌレマサリケレ

トナンヨメリカクハイフモノカウツクシケレハニヤアラン最思スナリ童言ニテハナニカハセンヲンナヲキナテヲシツヘシ悪クモアレイカニモアレ便リアラハヤラントテ置レヌメリ

八日碍ル事アリテナヲ同處ナリ今夜月ハ海ニソ入是ヲ見テ業平ノ君ノ山端ニケテ入スモアラナント云哥ナン覺ル若海邊ニテヨマヽシカハ波立碍テ入レスモアラナントヨミテマシヤ今此哥ヲ思出テアル人ノヨメリケル

照月ノ流ル見レハ天河イツカミナトハ海ニサリケル

九日ノツトメテ大湊ヨリ那波ノ泊リヲ追ントテコキ出ケリ是彼互ニ國ノ境ノ内ハトテ見送リニケル人數多カ中ニ藤原ノ言實橘ノ季衡長谷部ノ行政等御館ヨリ出給シ日ヨリ此彼ニ追來此人コソ志アル人ナリケル此人々ノ深キ志ハ此海ニハ劣ラサルヘシ是ヨ

リ今ハコキ離テ行ク是ヲ見送ラントテ某ノ人トモハ追來ケルカクテコキ行マニ〳〵海ノ邊リニ留人モ遠クナリ又舟ノモ見エスナリヌ崖ニモ云事アルヘシ舟ニモ思フコトアレト甲斐ナシカシト此哥獨言ニシテ止ヌ

思ヒヤル心ハ海ヲ渡レトモ文シナケレハ知スヤアルラン

宇多ノ松原ヲ行過ソノ松ノ數幾許幾千年歴タリト知ラス本毎ニ波打寄枝毎ニ鶴ソ飛違面白ト見ルニ堪スシテ舟人ノヨメル哥

見渡セハ松ノウレ毎ニ棲鶴ハ千世ノトチトソ思フヘラナル

トヤ此哥ハ處ヲ見ニエ勝ラスカクアルヲ見ツヽコキ行マニ〳〵山モ海モ皆暮レ夜深テ西東モ見エスシテ天ノ事楫取ノ心ニ任セツ男モ習ヌハ最モ心細シマシテ女ハ船底ニ首ヲツキ當テ昔ヲノミソ泣カク思ヘハ舟子楫取ハ舟哥ウタヒテ何トモ思ヘラス其ウタウ

哥

春ノ野ニテソ音ヲハナク我海ニテ手ヲ剪々摘タル菜ヲ親ヤ守ラン姑ヤ食ラン

歸ラヤ夜部ノ賣妹カ菜錢乞虚言ヲシテ賒態ヲシテ錢モ持テ來ス已タニ

是並ニ多カレト書ス此等ヲ人ノ咲フヲ聞テ海ハ荒ト心ハ少ナキヌカク行暮シテ泊リニ至リテ翁人獨タウメ獨アル中ニ心地悪ミシテ物モモノシ給テ潜リヌ

十日今日ハ那波ノ泊ニ留リヌ

十一日曉ニ舟出シテ室津ヲ追ヲ人皆マタ寢タレハ海ノアリ様モ見エス唯月ヲ見テソ西東ヲ知ケルカヽル間ニ皆夜明テ盥例ノ事トモシテ午ニナリヌ今シ羽ト云處ニ來ヌワカキ童此處ノ名ヲ聞テ羽ト云處ハ鳥ノ羽ノヤウニヤアルト云マタヲサナキ童ノコトナレハ人々咲フニアリケル

女童ナン此哥ヲヨメル

眞(マコト)ニテ名ニ聞所羽ナラハ飛カ如クニ京ヘモカナ

トテ云ヘル男モ女モイカテトク京ヘモカナト思フ心アレハ此哥好(ヨシ)トニハアラネトケニト思ヒテ人々忘ス此羽ト云處向童(フハ)ノ次テニソ又昔ツ人(イイ)ヲ思ヒ出テ何レノ時ニカ忘ルヽ今日ハマシテ母ノ哀ム事ハ下リシ時ノ人ノ數足(タラ)ネハ古キ哥ニ數ハ足(タラ)テソ歸ルヘラナル

ト云事ヲ思出テ人ノヨメル

世ノ中ニ思ヒアレトモ子ヲ戀フル思ヒニマサル思ヒナキカナ

ト云ツヽナン

十二日雨フラス文時(フントキ)維茂(コレモチ)カ舟ノヲクレタリシ鳴津(ナラシツ)ヨリ室津ニ來ヌ

十三日ノ曉ニ聊雨フルシハシアリテ止ヌ女是彼浴(ユアミ)ナトセントテアタリノ空キ處ニ下(ヲリ)

テ行海ヲ見ヤレハ

雲モ皆波トソ見ユル海士モカナ何レカ海ト向テ知ヘク

トナン哥ヨメルサテ十日餘リナレハ月面白シ舟ニ乘初シ日ヨリ舟ニハ紅コク好衣衣ス其ハ海ノ神ニ怖テモ忌テ何ノアシカケニコトツケテホヤノツマノイスシスシアハヒヲソ心ニモアラヌハキニモアケテ見セケル 私ニ云少無違

十四日曉ヨリ雨フレハ同處ニ留レリ舟君セチミス曹司物ナケレハ午時ヨリ後ニ楫取ノ昨日釣タリシ鯛ニ錢ナケレハ米ヲトリカケテヲチラレヌカヽル事多アリヌ楫取又鯛モテ來タリ米マケ屢來楫取氣色惡カラス

十五日今日赤小豆粥煮口惜クナヲ日ノ惡ケレハイサル程ニソ今日廿日アマリ昼ヌル徒ニ日ヲ送レハ人々海ヲナカメツヽソアル其童ノ云ル

立ハ立居レハマタ居ル吹風ト波トハ思フ同志ニヤアルラン

イフ甲斐ナキ者ノ云ヘルニハ最似付シ

十六日風浪止ネハナヲ同處ニ泊レリ唯海ニ波ナクシテイツカ深碕ト云處渡ラントノミナン思フ風浪共ニ止ヘクモアラスアル人ノ此波立ヲ見テヨメル哥

霜タニモ置ヌ方ソト云ナレハ波ノ中ニハ雪ソフリケル

サテ舟ニ乘シ日ヨリ今日マテニ廿日アマリ五日ニナリニケリ

十七日曇レル雲ナクナリテ曉ヅク夜イト面白ケレハ舟ヲ出シテコキ行此間ニ雲ノ上モ海ノ底モ同如クニナンアリケル宣モ昔ノ士ハ棹ハ穿波上月舟ハ翼海中空トハ云ケン

聞サレニ聞ルナリ又アル人ノヨメル

水底ノ月ノ上ヨリユク舟ノ棹ニ碍ルハ桂ナルラン

是ヲ聞テアル人ノマタヨメル

影見レハ波ノ底ナル久堅ノ空コキ渡ル我ソワヒシキ

カク云間ニ夜漸ク明行ニ楫取等黑雲俄ニ出來ヌ風吹ヌヘシ御舟歸シテント云テ舟歸ル

此間ニ雨フリヌイトサビシ

十八日ナヲ同處ニアリ海荒ケレハ舟出サヌ此泊リ遠ク見レトモ近ク見レトモ最面白シカヽレトモ苦シケレハ何事モ覺ス男同志ハ心ロ遣リニヤアラン唐詩ナト云ヘシ舟モ出サテ徒ラナレハアル人ノヨメル

磯フリノ寄ル磯ニハ年月ヲイツトモ別ヌ雪ノミソフル

此哥ハ常セヌ人ノ事ナリ又人ノヨメル

風ニ寄波ノ磯ニハ鶯モ春モエ知ラヌ花ノミソサク

此哥共ヲ少シ宜シト聞テ舟ノ長年シケル翁月來ノ苦キ心遣ニヨメル

立ナミヲ雪カ花カト吹風ニ寄ツヽ人ヲ謀ヘラナル

此哥共ヲ人ノ何カト云ヲアル人ノ又耽リテヨメル其哥ヨメル文字三十文字餘リ七字人皆ヱ有テ咲フヤウナリ哥主イト氣色悪クテエスマネヘトモエ學ス書リトモ讀敢難カルヘシ今日云難シマシテ後ニハイカナラン

十九日日悪ケレハ舟出サス

廿日昨日ノヤウナレハ舟出サス皆人々愁ヘ嘆ク苦ク心元ナケレハ唯日ノ歴ヌル數ヲ今日幾日二十日三十日ト計レハ拇モ損レヌヘシイトワヒシ夜ハイモ寢ス廿日ノ夜ノ月出ニケリ山ノ端モナクテ海ノ中ヨリソ出來カウヤウナルヲ見テヤ昔安倍ノ仲丸ト云ル人ハ唐ニ渡リテ歸リ來ケル時ニ舟ニ乘ヘキ處ニテ彼國人馬ノ餞シ別惜ミテ彼ノ

唐詩作リナトシケル厭スヤアリケン廿日ノ夜ノ月出ルマテソアル況ケルソノ月ハ海ヨリソ出ケル是ヲ見テ仲丸ノ主我國ニカヽル哥ナン神世ヨリ神モ詠給今ハ上中下ノ人モカウヤウニ別レ惜ミ喜モアリ悲モアル時ニハヨムトテヨメリケル哥

蒼海原俯仰見レハ春日ナル御笠ノ山ニ出シ月カモ

トソヨメリケル彼國ノ人聞知マシク覺ヘタレト支ノ心ヲ男文字ニ様ヲ書出シテ此言傳ヘタル人ニ云知セケレハ心ヲヤ聞得タリケンイト思ヒノ外ニナン愛ケル唐ト此國トハ言殊ナルモノナレト月ノ影ハ同シ事ナルヘケレハ人ノ心モ同シ事ニヤアランサキ今往昔ヲ想像テアル人ノヨメル哥

京ニテ山端ニ見シ月ナレト波ヨリ出テ波ニコソ入レ

廿一日卯ノ時ハカリニ舟出ス皆人々ノ舟出是ヲ見レハ春ノ海ニ秋ノ木葉シモ散ルヤ

ウニソアリケルヲホロケノ願ヒニヨリテニヤアラン風モ吹ス好キ日出來テコキ行此間ニ使レントテ附テ來童アリソレカウタフ舟哥

ナヲコソ國ノ方ハ見ヤラルレ我父我母有トシ思ヘハ歸ラ○ヤ

ウタフソ哀ナルカクウタフヲ聞ツヽコキ來ルニ黑鳥ト云鳥巖ノ上ニ集リヲリ其巖ノ本ニ波白ク打寄楫取ノ云ヤウ黑鳥ノモトニ白キ波ヲ寄ルトソ云此詞何トニハナカレト物云ヤウニソ聞ヘタル人程ニ合ネハ尤ルナリカク云ツヽ行ニ舟君ナル人波ヲ見テ國ヨリ始テ海賊報セント云ナル事ヲ思フ上ニ海ノマタ怖ケレハ首モ皆白ケヌ七十八十年ハ海ニアルモノナリケリ

我髮ノ雪ト磯邊ノ白波ト何レ勝レリ洋中島守

ト楫取イヘリ

廿二日夜部泊ヨリ異泊ヲ追テ行遙ニ山見ユ年九ツ計ナル男ノ童年ヨリハ少ソアル此童舟ヲユクマニ〳〵山モ行ト見ユルヲ見テ怪言哥ヲソヨメル其哥

コキテ行舟ニテ見レハ足引ノ山サヘ行クヲ松ハ知スヤ

トソ云ヘルヲサナキ童ノ事ニテハ似付シ今日海荒ケ磯ニ雪フリ波ノ花サケリアル人ノヨメル

波トノミ偏ニ聞ケト色見レハ雪ト花トニ迷ヒケル哉

廿三日日照テ陰ヌ此渡リ海賊畏アリト云ヘハ神佛ヲ祈ル

廿四日昨日ノ同處ナリ

廿五日楫取等ノ北風悪ト云ヘハ舟出サス海賊追來ルト云事絶ス聞ユ

廿六日誠ニヤアラン海賊追ト云ヘハ夜半許ヨリ船ヲ出テコキクル道ニ手向スル所ヲ

リ楫取シテ幣献幣ノ東ヘ散レハ楫取ノ白テ献言此幣ノ散事ニ御舟速ニコカシメ給ヘト白シテ献是ヲ聞テアル童ノヨメル

海ノチフリノ神ニ手向スル幣ノ追風止ス吹ナン

トソヨメル此間ニ風ノ好ケレハ楫取イタク誇リテ舟ニ帆掛ナト喜フ其音ヲ聞テ童モ女モイツシカトシ思ヘハニヤアランイタク喜フ此中ニ淡路ノタウメト云人ノヨメル

追風ノ吹ヌル時ハ行舟ノ帆手拍テコソウレシカリケレ

トソテイケノコトニツケツヽ祈ル

廿七日風吹波荒ケレハ舟出サス是彼賢ク嘆ク男タチノ心慰メニ唐詩ニ日ヲ望メハ京遠シナト云ナル事ノ様ヲ聞テアル女ノヨメル

日ヲタニモ天雲近ク見ル物ヲ京ヘト思フ路ノ遥ケサ

又アル人ノヨメル

吹風ノ絶ヌ限リシ立來ハ波路ハイト、遙ケカリケリ

日一日風止ス彈指シテ寐ヌ

廿八日終夜雨止ス今朝モ

廿九日舟出テ行浦毎照テコキ行爪最長ナリニタルヲ見テ日ヲ計レハ今日ハ子ノ日ナリケレハ剪ス睦月ナレハ京ノ子ノ日ノ事云出テ小松モカナト云ヘト海中ナレハ難シカシアル女ノ書テ出セル哥

覺束無今日ハ子ノ日カ海士ナラハ海松ヲタニ引マシ物ヲ

トソ云ヘル海ニテ子ノ日哥ニテハイカヽアランアル人ノヨメル哥

今日ナレト若菜モ摘ス春日野ノ我コキ渡ル浦ニナケレハ

カク云ツヽコキ行面白キ處ニ舟ヲ寄テ爰ヤイヅコト問ケレハ土左泊ト云ケル昔土左ト云ケル處ニ住ケル女此舟ニ交リケリ某云ケラク昔シハシ在シ處ノ名類ニソアナル哀ト云テヨメル哥

年比ヲ住シ處ノ名ニシ負ハ來テ寄波ヲモ哀トソ見ル

トソイヘル

卅日雨風吹ス海賊ハ夜行セサナリト聞テ夜半計ニ舟ヲ出シテ阿波ノ深渡ヲ渡ル夜中ナレハ西東モ見エス男女カラク神佛ヲ禱テ此深渡ヲ渡リヌ寅卯ノ時ハカリニ奴島ト云處ヲ過テ田無川ト云處ヲ渡ルカラク急テ和泉灘ト云處ニ至リヌ今日海ニ波ニ似タルモノナシ神佛ノ惠ミ恤ルニ似タリ今日舟ニ乘シ日ヨリ計レハ三十日アマリ九日ニナリニケリ今ハ和泉ノ國ニ來ヌレハ海賊物ナラス

二月朔日朝ノ間雨フリ午時ハカリニ止ヌレハ和泉ノ灘ト云處ヨリ出テコキ行海ノ上昨日ノ如ニ風波見エス黑崎ノ松原ヲ經テ行ク處ノ名ハ黑ク松ノ色ハ青ク磯ノ波　雪ノ如クニ樟ノ色ハ蘇枋ニテ五色ニ今一色ソ足ヌ此間ニ今日篋ノ浦ト云處ヨリ綱手挽テ行カク行間ニアル人ノヨメル哥

玉クシケ篋ノ浦波立ヌ日ハ海ヲ鏡ト誰カ見サラン

又舟君ノ曰ク此月マテナリヌル事トテ嘆テ苦キニ堪スシテ人モ云事トテ心遣ニイヘル哥

引舟ノ綱手ノ長キ春ノ日ヲ四十日五日マテ我ハ經ニケリ

聞人ノ思ヘルヤウナソ直詞ナルト竊ニ云ヘシ舟君ノカラク拈出シテ好ト思ヘル事ヲエシモコソ誣ヘトテツヽメキテ止ヌ俄ニ風波高ケレハ留リヌ

二日(イ本)雨風ヤマス日ヒトヒ夜モスカラ神ホトケヲイノル　私ニ云正本ニ二日ハナシ

三日海上昨日ノ様ナレハ舟出サス風ノ吹事止ネハ崖(キシ)ノ浪立歸ル是ニツケテヨメル

哥

緒ヲヨリテ甲斐ナキ物ハ落積(ヲチツモリ)リ涙ノ玉ヲ貫(ヌカ)ヌナリケリ

カクテ今日暮ヌ

四日楫取今日風雲ノ氣色甚惡(ケシキタ)シト云テ舟出サスナリヌ然共終日(ヒネモス)ニ波風立ス此楫取日モエ計(ハカラ)ハヌカタヰナリケリ比泊ノ濱ニハ種々(クサ〳〵)ノノ麗(ウルハシ)キ貝石(カヒイシ)ナト多(ヲホ)カリカヽレハ唯昔ノ人ヲ戀ツヽ舟ナル人ノヨメル

寄ル波打モヨセナン我戀ル人忘レ貝下(ヲリ)テ拾(ヒロハ)ン

ト云ヘレハアル人ノ堪スシテ舟ノ心ヤリニヨメル

忘貝拾ヒシモセシ白玉ヲ忘ルヲタニモ形見ト思ハン

トナン云ヘル女兒ノ爲ニハ親少(セサナクナリヌヘシイ本如此ニ入レ(ママ))クナリヌヘシ玉ナラスモアリケンヲト人云ンヤサレト

モシヽカホヨカリキト云ヤウモアリナヲ同處ニ日ソ經(フ)ル事ヲ嘆テアル女ノヨメル哥

手ヲ浸(ヒテ)テ寒サモ知(ラ)ヌ泉ニソ汲トハナシニ日比經ニケル

五日今日カラクシテ和泉ノ灘ヨリ小津(ヲツ)ノ泊ヲ追松原目モ杳々ナリ是彼(レレ)苦ケレハ

行(ク)トナヲ行ヤラレヌハ妹カ紡(ウム)ヲツノ浦ナル崖ノ松原

カク云ツヽ來(クル)程ニ舟トクコケ日ノ好ニト催セハ楫取舟言(フナコト)ニ曰ク

御舟ヨリ課給(オフセタフ)ナリ朝北(アサキタ)ノ出來(イヤコ)ヌ先(サキ)ニ綱手ハヤ挽(ヒケ)ト云フ此詞ノ哥ノヤウナルハ楫取ノ

自(ラ)ノ詞ナリ楫取ハウツタヘニ我レ哥ノヤウナル事云フトニモアラス聞人ノ怪(アヤシ)ク哥メ

キテモ云ツルカナトテ書出セレハケニ三(ミ)十(ソ)文字アマリナリケリ今日波ナ立ソト人々終(ヒネ)

日(モス)ニ禱ル驗アリテ風波立ス今シ鷗モ群集(ムレキ)テ遊フ處アリ京ノ近ク喜ノアマリニアル童ノヨメル哥

禱リ來ルカサマト(風間ト思ツヲ)モフヲアヤナクニ鷗メサヘタニ波ト見ユラン

ト云テ行間ニ石津ト云處ノ松原ノ面白クテ濱邊遠シ又住吉ノ渡リヲコキ行アル人ノヨメル

今見テソ身ヲハ知ヌル住ノ江ノ松ヨリサキニ我ハ經ニケリ

爰ニ昔ツ人ノ母一日片時(ヒトヒカタトキ)モ忘ネハヨメル

住ノ江ニ舟刺寄(サシヨセ)ヨ忘草驗シアリヤト摘テ行(ユク)ヘク

トナンウツタヘニ忘レナントニハアラテ戀シキ心地シハシ休メテ又モ戀ル力(チカラ)ニセントナルヘシカク云テナカメツヽクル間ニユクリナク風吹テコケトモ〳〵後退(シリヘシソキ)ニ退(シソキ)テ程々

シクウチハメツヘシ楫取ノ曰ク此住吉ノ明神ハ例ノ神ソカシ欲物ヲハスラントハイマメクモノカサテ幣ヲ奉給ヘト云フ云ニ隨ヒ幣奉カク奉レヽトモ專風止テ彌吹ニ彌立ニ風浪ノ危ケレハ楫取又曰ク幣ニハ御心ノ行ネハ舟モ行ヌナリナヲ嬉ト思ヒ給ヘキ物奉給ヘト云フマタ云ニ隨ヒテイカヽハセントテ眼モコソ二ツアレ唯一ツアル鏡ヲ奉ルトテ海ニ打ハメツレハ口惜シサレハウチツケニ海ハ鏡ノ如ナリヌレハアル人ヨメル哥

千早振神ノ心ヲ荒ル海ニ鏡ヲ入レテ且見ツル哉

イタク住ノ江忘草崖姫松ナト云フ神ニハアラスカシ目モウツラ〳〵鏡ニ神ノ心ヲコソハ見ツレ楫取ノ心ハ神ノ御心ナリケリ

六日ミヲツクシノモトヨリ出テ難波ノ津來テ河尻ニ入皆人々女少者額ニ手ヲ當テ喜

フ事ニツナシ彼ノ舟酔ノ淡路島ノ巨子京近クナリヌルト云ヲ喜ヒテ船底ヨリ首ヲ擡サセテカクソ云ヘル

イツシカトイフセカリツル難波潟葦コキ避テ御舟來ニケリ

イト思ノ外ナル人云レハ人々怪カル是カ中ニコチ惱ム舟君イタク愛テ舟酔シ給シ御顏ニハ似スモアル哉ト云ヒケル

七日今日河尻ニ舟入立テコキ上ルニ河ノ水乾テ惱ミ煩フ舟ノ上ル事イト難シカヽル間ニ舟君ノ病者モトヨリコチクシキ人ニテカウヤウノ事更ニ知サリケリカヽレトモ淡路タウメノ哥ニ愛テ京誇ニモヤアランカラクシテ怪キ哥拈リ出セリソノ哥

來ト來テハ河ノ堀江ノ水ヲ淺ミ舟モ我身モ困今日哉

是ハ病ヲスレハヨメルナルヘシ一哥ニ事ノ飽ネハ今一ツ

疾ト思フ舟懶スハ我爲ニ水ノ心ノ淺キナリケリ

此哥ハ京近クナリヌル喜ニ堪スシテイヘルナルヘシ淡路ノ子ノ哥ニ劣レリ妬云サラマシモノヲト悔シカルウチニイリテ寐ニケリ

八日ナヲ河ノ邊ニ困テ鳥養ノ御牧ト云フ邊リニ留今夜舟君例ノ病ヒヲコリテイクク惱ムアル人聊ナル物モテ來タリ米シテカヘリ事ス男共竊ニ云ナリ飯乾持ルトヤカウヤウノ事處々ニアリ今日セチミスレハ魚用ヒス

九日心元ナキニ明ヌ虛舟ヲ引ツヽ上レトモ河ノ水ナケレハキサリニノミソキサル此間ニ和田ノ泊ノ厭ノ處ト云處アリ米魚ナト乞ハ贈ツカクテ舟引上ルニ汀ノ院ト云處ヲ見ツヽ行其院昔思ヒヤリテ見レハ面白カリケル處ナリ後ナル岡ニハ松ノ木トモアリ中ノ庭ニハ梅ノ花サケリ爰ニ人々ノ曰クコレ昔名高ク聞ヘタル處ナリ故惟高ノ御子ヲ

ホン供ニ故在原ノ業平ノ中將ノ世ノ中ニ絶テ櫻ノサカサラハ春ノ心ハ長閑ケカラマシト云哥ヨメル處ナリケリ今興アル人處ニ似タル哥ヨメリ

千世經タル松ニハアレト古ノ聲ノ寒サハ替ラサリケリ

又アル人ノヨメル

君戀テ世ヲ經ル宿ノ梅ノ花昔ノ香コソナヲ匂ヒケル

ト云ヒツヽソ京ノ近クヲ喜ヒツヽ上ルカク上ル人々ノ中ニ京ヨリ下リシ時ニ皆人子共ナカリキ至リシ國ニテソ子生ルモノ共アリアヘル人皆舟ノ泊ル處ニ子ヲ抱キツヽ下上ス是ヲ見テ昔ノ子ノ母悲キニ堪スシテ

ナカリシモアリツヽ歸ル人ノ子ヲアリシモナクテ來ルカ悲サ

ト云テソ泣ケル父モ是ヲ聞テイカヽアランカウヤウノ事哥好ムトテアルニモアラサル

ヘシ唐モ此モ思フ事ニ堪ヌ時ノ態トカ今夜宇土野ト云處ニトマル

十日サハル事アリテ上ラス

十一日雨聊フリテ止ヌカクテサシ上ルニ東ノ方ニ山ノ横折ルヲ見テ人ニ問ハ八幡ノ宮ト云フ是ヲ聞テ喜テ人々拜ミタテマツル山崎ノ端見ユ嬉キ事限リナシ爰ニ相應寺ノ邊リニ暫舟ヲ駐テトカク定ムル事アリ此寺ノ崖邊ニ柳多アリアル人此柳ノ河ノ底ニ移レルヲ見テヨメル哥

漣漪寄ル紋ヲハ青柳ノ陰ノ糸シテ織カトソ見ユ

十二日山崎ニトマレリ

十三日ナヲ山崎ニ

十四日雨フル今日車京ヘ取ニヤル

十五日今日車將來リ舟六借サニ舟ヨリ人ノ家ニ移ル此人ノ家喜ヘルヤウニテ主シタリ此主ノ又主ノヨキヲ見ルニウタテヲモホユ色々ニ返事ス家ノ人出入ニクケナラスイヤヽカナリ

十六日今日ノ夕サツ方京ヘ上ル次テニ見レハ山崎ノ小櫃ノ繪モマカリノヲホチノカタモ替ラサリケリウリ人ノ心ヲソ知ストソ云ナルカクテ京ヘ行ニ島坂ニテ人主シタリ心シモアルマシキ態ナリ立チ行シ時ヨリハ來時ソ人ハトカクアリケル其ニモ返事ス夜ニナシテ京ニハ入ント思ヘハ急シモセヌ程ニ月出ヌ桂川月ノ明キニソ渡ル人々ノ曰ク此川飛鳥川ニモアラネハ淵瀬更ニ替ラサリケリト云テアル人ノヨメル哥

久方ノ月ニ生タル桂川底ナル影モ替サリケリ

又アル人ノイヘル

天雲ノ遥ナリツル桂川袖ヲ浸テモ渡リヌル哉

又アル人ヨメリ

桂川我心ニモ通ネト同シ深サニ流ルヘラナル

京ノ嬉キアマリニ哥モアマリソ多カル夜深テ來ハ處々モ見エス京ニ入タチテ嬉シ家ニ至リテ門ニ入ニ月明ケレハ最ヨクアリサマ見ユ聞シヨリモマシテ云甲斐ナクソ壁破レタル家ニ預タリツル人ノ心モ荒タルナリケリ中垣コソアレ一ツ家ノヤウナレハ望テ預レルナリサルハ便リ毎ニ物モ絶ス得サセタル今夜カヽル事ト聲高ニ物モ云セス最ハツラク見ユレト志ハセントスサテ池メイテクボマリ水ツケル處アリ邊ニ松モアリキ五年六年ノ内ニ千年ヤ過ニケン片枝ハナクナリニケリ今生タルソ雜レル大形ノ皆荒ニタレハ哀トソ人々云フ思ヒ出ヌ事ナク思ヒ戀シキカ内ニ此家ニテ生レシ女兒ノ諸共ニ歸ラ

ネハイカ、ハカナシキ舟人モ皆子抱テノ、シルカ、ル内ニナヲ悲ニ堪スシテ竊ニ心知レル人ト云ヘリケル哥

生レシモ歸ラヌモノヲ我宿ニ小松ノアルヲ見ルカ悲シサ

トソ云ヘルナヲアカスヤアランマタナシ

見シ人ノ松ノ千年ニ見マシカハ遠ク悲キ別セマシヤ

忘難ク口惜キ事多カレトエ盡サストマレカクマレトク遣テン

土左日記以貫之自筆本故將軍御物希代之靈寶也今度密々自小川御所申出之依或人數寄深切所望書之古代假字猶蝌蚪未愚覽寫有魯魚乎後見輩密之而已

宋憲臨レ寫イ本　　察イ

明應壬子仲秋候　　亞槐藤臣判

延長八年庚寅土左の國にくたりて承平五年乙未京にのぼりて左太臣殿白河殿におはします御ともにまふてたる哥つかふまつれとあれはよめる

百草の花のかけまて移しつゝ
　　音もかはらぬ白河の水

右貫之集第六卷にあり此間六年也彼日記は此時にあらさる歟と見ゆ

右妙壽院以自筆本一字不違朱句切假名一字不違書寫畢

昭和五年六月一日印刷
昭和五年六月五日發行
昭和十四年六月二十日第八刷發行

土佐日記★

定價二十錢

岩波文庫
641

校訂者　池田龜鑑（いけだきかん）

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店

電話〇一八七・〇一八八番
九段〇一八九・〇一八〇番
振替口座東京二六二四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。

（榎本製本）

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫最新刊書

既刊九七〇册（昭和十四年五月）

目錄進呈

「解說附目錄」及び「分類一覽表」があります。御申越頂けば早速お送り申上げます。

チェーホフ一幕物全集　米川正夫譯　★★
文化科學と自然科學　リッケルト著　佐竹・豐川譯　★★
天草本伊曾保物語　新村出飜字　★
牛肉と馬鈴薯　他三篇　國木田獨歩作　★
古代希臘文學總說　ジェブ著　木下正路譯　★★
シェイクスピアの悲劇　下　ブラッドレー著　中西信太郎譯　★★
西國の伊達男　シング作　山本修二譯　★
サン　ファミーユ（定なき兒）中　エクトル・マロ　津田穰譯　★★
海國兵談　林子平述　村岡典嗣校訂　★★
義經記　島津久基校訂　★★★
日本外史（二）　頼山陽著　頼成一譯　★★

黑い眼と茶色の目　德冨健次郎作　★★
エマスン論文集 II　細慮・勇壯・大靈　他四篇　戸川秋骨譯　★★
綠のハインリヒ（二）　ケラー作　伊藤武雄譯　★★
人形の家　イプセン作　竹山道雄譯　★
松平定信　花月草紙　西尾實　松平定光校訂　★★
金色夜叉　上卷　尾崎紅葉作　★★★
虛榮の市（二）　サッカレ作　三宅幾三郎譯　★★
わが心の記　ヂニフリーズ著　壽岳しづ譯　★
サン　ファミーユ（家なき兒）下　エクトル・マロ　津田穰譯　★★
モンテーニュ論　ジイド著　渡邊一夫譯　★
鑑草　附春風・陰隲　中江藤樹著　加藤盛一校註　★★

南總里見八犬傳（六）　曲亭馬琴作　小池藤五郎校訂　★★

號外・少年の悲哀　他六篇　國木田獨歩作　★

海へ騎りゆく人々　他二篇　シング作　山本修二譯　★

旅の日のモーツァルト　メーリケ作　石川錬次譯　★

ボヴァリー夫人　上卷　フローベール作　伊吹武彦譯　★★

ボヴァリー夫人　下卷　フローベール作　伊吹武彦譯　★★

本朝廿四孝　近松半二作　守隨憲治校訂　★

日本外史（三）　頼山陽著　頼成一譯　★★

闇櫻・うもれ木　他二篇　樋口一葉作　★

奇妙な幕間狂言　オニール作　井上・石田譯　★★★

笛師のむれ（下）　ジョルジュ・サンド作　宮崎嶺雄譯　★★★

大尉の娘　プーシキン作　神西清譯　★★

根岸守信　耳袋　上卷　柳田國男　尾崎恒雄校訂　★★

根岸守信　耳袋　下卷　柳田國男　尾崎恒雄校訂　★★

かくれんぼ　他二篇　齋藤綠雨作　★

お氣に召すまま　シェイクスピア作　阿部知二譯　★★

ベールキン物語（短篇五種）　プーシキン作　神西清譯　★

ハンスリック　音樂美論　田村寛貞譯　★★

ブルックハルト　伊太利文藝復興期の文化　下卷　村松恒一郎　藤田健治譯　★★★

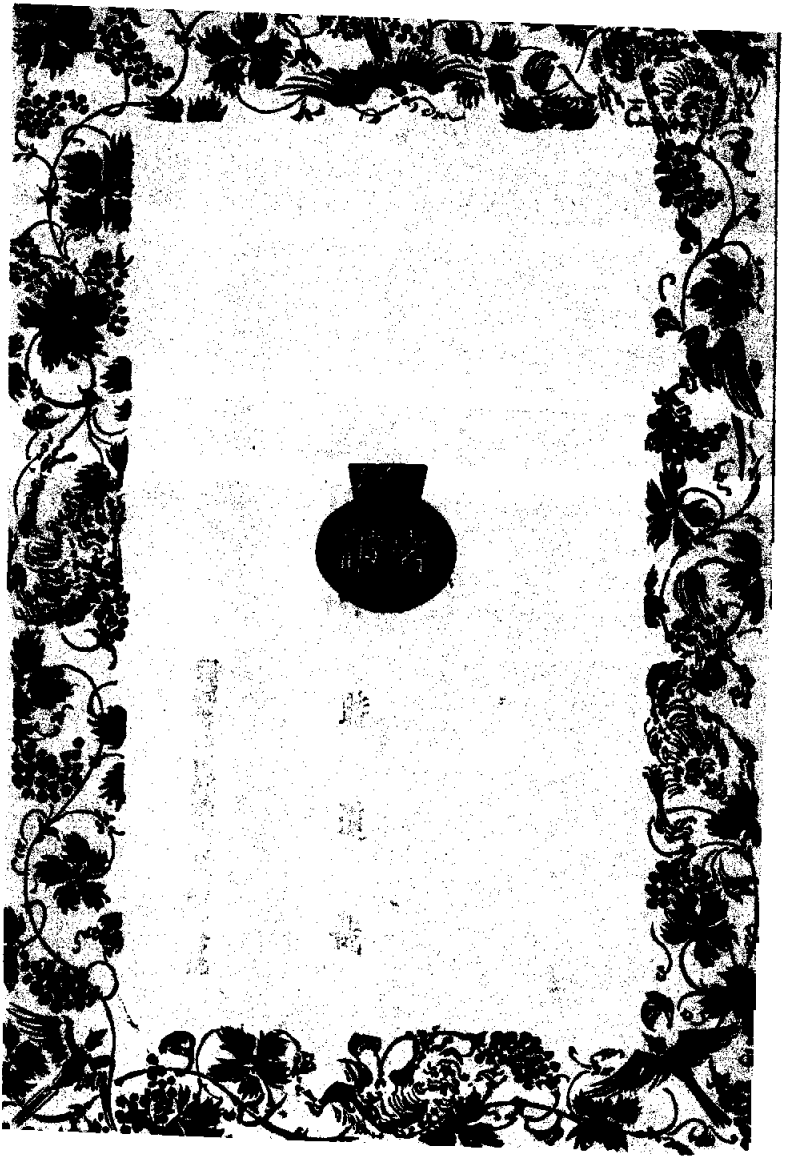
常山紀談　中卷　湯淺常山著　森銑三校訂　★★

香川景樹歌集　桂園一枝　正宗敦夫校訂　★★

小鳥の巣　鈴木三重吉作　★★★

藝術を愛する一修道僧の眞情の披瀝　ヴッケンローダー著　江川英一譯　★★

フィンランド敍事詩　カレワラ　上　森本覺丹譯　★★

正法眼藏　上卷　道元禪師著　衞藤卽應校註　★★★

人間の使命　フィヒテ著　宮崎洋三譯　★★